

稲刈り祭に最多の131人

親子連れが「分業」して刈る

10月2日（日）に催された広町田んぼの会の稲刈り祭に、会のスタッフをふくめ、131人が参加し、約6アールの稲を全て刈って、入り口近くの広場に運び、スギ丸太とモウソウダケで組んだ「はさ」（稲架け）に架けた。



稲刈り祭はことしで6回目。これまでは2年前の参加者110人が最多だったが、それを上回り、11月に開く収穫祭、6月の田植え祭と並んで、「地域の祭」として定着したことを物語った。

朝9時前から、親子連れが次ぎ次ぎに緑地に集まって来た。9時15分、スタッフが刈り方や、稲の束ね方を説明。そのあと、一斉に5枚の田んぼに散って刈り始めた。9月21日の台風15号に



よる大風で、稲はほぼ全部、南東方向に倒れていたが、穂が泥につくまでには倒れず、鋸釜（のこぎりがま）を使って、手で刈るのには支障なかった。

子どもたちも「背負いこ」、

「駕籠屋ごっこ」で運搬



刈り、束ね、運ぶ、はさに架けるまでが「稲刈り」だ。稲刈り祭の2、3回目ごろまでは、刈った稲が田んぼに山積みになったりしたが、常連参加者が多くなったせいか、子どもが刈る稲を、親が束ね、畦に運ぶ「親子分業」が確立し、効率が上がった。畦に並ぶ稲束は、スタッフがリヤカーに積む場所に運んだが、いっしょに運ぶ父親も少なくなかった。

面積が1アール足らずの「さくら田んぼ」と「つきし田んぼ」は、10時半前に刈り終わり、そのころから稲束を入り口広場の「はさ」に運ぶ作業が本格化した。



2台のリヤカー、一輪車で運搬はスタッフが中心だったが、子どもたちも運搬に、積極的だった。「背負いこ」を背中に負い、横に積んだ稲束を運んだり、2人が2メートルほどの竹棒を前後に担ぎ、竹棒に稲束を5～6つ、振り分け荷風に架ける「お猿の駕籠やごっこ」でエッサホイッサと運んだり。

おにぎりが待っていた



横木を高さ80センチおきに、3段に組んだ「はさ」に架けるのは、かなり手間がかかる。稲の運搬は11時半すぎに終わったが、はさに架け終えたのは正午過ぎだった。はさの前で全員が記念撮影のあと、用意したおにぎりの提供。子どもたちが歓声を上げて、2個ずつのパック詰めの前に並んだ。



おにぎりは去年の収穫米を粳のまま、保存したもので、女性スタッフが稲刈りの間に準備し

た。11月19日（土）に開く収穫祭（雨天順延）には、この日に刈った稲で、新米のおにぎりやお餅を作って提供する。

秋空に浮かぶ稲束

朝から曇り空だったが、おにぎりをぱくついているうち、日が射し、はさに架けた稲が秋空に浮かび上がった。

